

閑話三題



随筆

藍山啓外*

Ecdysis from the International community to Global society

Key Words: 難波宮, マレーシア, ボーダレス社会

1. はじめに

「^{あいやまひろと}藍山啓外」は、私の雅号である。まだ、これまで使ったことはない。中学生だったか、授業で落款を作り色紙に文字を書いたことがあった。文字は、すぐ決まり「徳」。雅号は、いろいろ考えた挙句、名前は、現世における仮の呼び名、露や風のような、はかなきものと考え、「^{ろふう}露風」に決めた。家に帰って母に見せると、「三木露風と同じだね」と言われた。私は全く聞いたこともなかった。慌てて、落款を削り直して雅号を「啓外」にした。当時、読んでいた本の^{とうやま ひらく}遠山 啓という著者名を急遽借用させてもらった。その落款も一度使用したきりで、それ以後使うことはなかった。

普通は、雅号に姓はない。添削付き企業向け訓練教材を出版する際に、ペンネームのため藍山を加えた。未来洋々たる多くの学生諸君に接し、彼らが我々を乗り越えて偉くなって欲しいという思いで「出藍の誉れ」から借りた。もっとも、これには別の裏がある。図書館では、同一分類の本は著者名の五十音順に書架に並べる。愛読した赤川次郎の本の隣に並べて欲しかったからである。しかし、ペンネームでの出版は許してもらえず、企業を退職した先輩の名前をお借りした。結果、それ以来「藍山啓外」は、一度も使用されず、永らく封印されたままであった。リタイアをきっかけに、ペンネーム藍山啓外を解禁

し、今回はこれにて失礼させていただくことにする。

2. ダムの底から古い大阪文化が現れるごとく

私が企業から大阪大学に戻ったのは、1990年である。それまで、日本の景気は、うなぎのぼり。日本の技術もジャパン・アズ・ナンバーワンと呼ばれ、日本製品は肩で風を切って輸出されていた頃である。大阪には電気製品の大量生産を得意とする会社が多かった。日本製品は信頼性が高いので、新興国に負けることはないとの自負を持っていた人達も多かった。

当時、横須賀から大阪に戻ったばかりなので、足繁く近所の図書館に通い大阪の文化や歴史の本を読んでいた。ある時、「難波京跡」の発掘調査をまとめた古くて分厚い資料本を借り、通勤途上の環状線で読んでいた。隣の席に座った人が、「なつかしい本を読んでいるのですね」と声をかけてくれ、飛鳥時代にまでさかのぼることができる遺跡に対する大阪人の思い入れをその時知った。同時に、その本からは、国立大阪病院建築の予定を遺跡から隣の地に移し、前を横切る高速道路を高架ではなくわざわざ地上に走らせていることも知った。近年、NHKが西に移築され、併設する歴史博物館の中に古い地層を宙づりにして展示し、その柱跡を地上にタイル表示していること、出張でお邪魔する西日本NTT本社の土地の半分が駐車場になっていて建物がないことなど、遺跡の保全と大阪城を含めた景観保全に努力した人々の帰結であることが、紛れも無い事実と知ることになるが、今では、これを知る大阪人は少ない。

その後、バブル崩壊、急激な円高の進展が進み、^{Lost Decade}失われた10年がスタートするが、当時の感想では10年どころか、この先、いつまで経っても景気は浮上しないだろうと予感しており、むしろ経済規模



* Hiroto AIYAMA

1947年4月生
大阪大学大学院工学研究科 通信工学専攻 修士課程修了(1972年)
現在、マレーシア工科大学(UTM) 日本マレーシア国際工科院(MJIIT) 教授
工学博士(大阪大学) 情報通信工学
TEL: +6 03-22031246
FAX: +6 03-22031266
E-mail: komaki@ic.utm.my
E-mail: hiroto.aiyama@gmail.com

を小さくし、あたかも、ダムの水位を下げ、底から鎮守の森と神社が現れてくるがごとく、大阪の古い文化が浮き出てくるのがいいと思っていた。事実そのように進んできているように思うし、今もそう思っている。京都は、経済規模が小さくて古い建物や文化のリニューアルができず、そのまま残り、独自の文化を大切に発展し、それに基づく独自の技術を発展させてきている。大阪の古い文化をもう一度見直し、独自の文化の上に、独自の技術が開花することを願っている。「大阪都構想」は、威勢が良いが、東京都の様な都市づくりを目指すよりも、むしろ摂津、河内などのもう少し小さな単位の村や藩がその責任と独自性を持って活動する江戸以前の姿を参考にするのがいいと考えている。めざすは、松山のような文人が生き、観光客が集まる「ヒトのサイズにあった町」だと思ふ。大阪には人情と笑いという観光客を引きつけるものがある。

大阪城を訪れる人は多いと思うが、さびれて、草ぼうぼうの難波京跡を訪れる人は少ない。今、ここに佇んでいるとその思いが強い。特に夕暮れの頃がいい。



難波京跡

難波京跡と NTT 西日本のビル、NTT 敷地の半分は駐車場になっており、建物は建てられていない。写真には写っていないが、左の方には、地面を走る阪神高速道路がある。史跡保護のため高架橋の建設を行っていない。側道の一般道は混雑の名所になってはいるが、広い空間が整然かつゆったりと確保され、その向こうにたたく大阪城の遠景を見ることができる。さらに左側には、京跡の柱穴が空中保存された大阪歴史博物館、景観と史跡の防護を目的に西に移築されたNHK大阪支社ビルがある。大阪城の背景となるOBPの近代ビルの景観が若干ミスマッチである。

3. ルック・イースト政策（東方政策）

私は現在、マレーシアに来ている。マレーシアの国名を知る人は多い。しかし、実際にその実体はと聞かれると、はたと困ってしまう人達が、ほとんどであろう。隣国のタイやシンガポールは、よく知られており、一度は訪問した人も多い。日本人からマレーシアを見た場合、一言で言うと、特徴が無く、存在感のない国と言え。私も、普通の日本人と全く同じ感想を持っていた。しかし、一度訪問すると分かる。クアラルンプール市内の中心であるKLCCは、日本を越える先進的な建物が並ぶ場所であることに気づく。中でも写真に示すペトロナス・ツインタワーの景観は圧巻である。その美しさと荘厳さは有名であり街のシンボルとして皆が認めるところである。特に夜のライトアップされた姿は、おとぎの国に紛れ込んだかと思われるほど印象深く、もう一度会いに来てみたいと思う。これは、単なる建物の素晴らしさに感動しているだけではなく、夕焼けの法隆寺・法起寺・法輪寺の五重塔に巡りあった時や月光に冴え渡る薬師寺三重塔と対峙している時と同一延長線上にある感覚である。いわゆる、宗教に関連する美学的一体感と同一のものではないかと思う。

マレーシアはイスラム教徒であるマレー系を主体に、インド系、中国系など多国籍国家であり、西洋の文物とともに日本や中国アジアの優れた文物を安価にうまく取り入れて世界的に見ても最先端の発展をしてきている。ちなみに、ツインタワーの建設には、一方のタワーに日本、他方に韓国、二つをつなぐブリッジにフランスが参加している。日本のような国粹主義・垂直統合型ではなく、多くの優れた国の力を天秤にかけ、競わせながら先端的かつ安くインフラを構築できるというマレーシア多国籍文化の特徴とマネジメントの強さを見本にしたような例が、この建造物である。

マレーシアの人々は、大の親日派である。日本人に対する尊敬心は今でも強い。これは、マハティール首相が日本を訪れ、日本の文化（倫理観）と技術力（労働倫理観）を見て驚き、「東方政策：Look East Policy」を30年以上前に打ち立てて推進してきたことによる。現在では、「東方」の定義には、日本だけでなく韓国や台湾・中国が含まれる。「今後の東方政策は、日本が失敗した原因をさぐり、同

じ過ちをしないことだ」と言われたいようにだけはしたい。



ペトロナス・ツインタワー

クアラルンプール・シティ・センター (KLCC) にある公園から見たペトロナス・ツインタワー。日本と韓国がそれぞれを建設し、中央のブリッジをフランスが建てた。夜のライトアップされた姿、昼の太陽に輝く姿は、特に素晴らしい。公園内の噴水が音楽に合わせて踊り、色とりどりに照明される姿もすばらしく、KLっ子の憩いの場所になっている。大きなショッピングモール・スリアが隣接し、ブランドショップ、伊勢丹などが入っており、そのグレードもなかなか高い。昼休みにビジネスマンが公園内をジョギングする姿も見られる。大阪城公園に似ていて、大阪のニューオータニホテルに相当するホテルとして、日航ホテルがあったが、近年、インターコンチネンタルホテルとなっているのも、時代の波を感じる。

4. 「モノの輸出からヒトの輸出」へ

「コシクリートからヒトへ」これは、民主党政権が樹立された際のスローガンである。少子化・高齢化対策のため、いらぬ公共投資を減らして、子供の教育費用と年金に国のお金を回すということであった。しかし、この言葉を、一歩進め「モノ輸出からヒトの輸出へ」という言葉に替えて、日本の将来を考え直してみてもよい。

日本は、これまで「ものづくり」を中心に据え、国内で工業製品を設計開発製造し、大量生産して輸出することにより国を運営してきた。現在では、工

業製品のほとんどを生産コストの低い国で製造している。しかし、生産コストの低い国も、その技術やノウハウをやがては知ることになり、設計や開発する能力が自然に備わる。いわゆる、「技術の空洞化」である。日本企業は、この空洞化を恐れ、生産拠点を次々とコストの低い場所に移し替える、「焼き畑工業」という手法を取ってきた。

しかし、近年、日本という国境の中に座し、狭い国の需要にもとづく製品を製造販売し、その後、外国の製造拠点で大量生産し国際的に市場を展開するという手法は、「ガラパゴス」と呼ばれていて、もはや、国境のないグローバル・マーケットには通用しない。たとえば、情報通信機器のように次々と新しい技術を必要とし、かつ、それぞれの国の独自の需要に適合する設計要素が必要となる製品は、多品種変量生産が必須となる。この場合、大量生産を前提とした「焼き畑工業」は、うまく機能しない。

シェアは低くても、ある程度のマーケットサイズを確保可能なグローバル・マーケット用の製品として最初から設計開発し、生産と一体化することが必須となっている。グローバル需要とドメスティックマーケットを迅速に判断し、設計・開発から製造段階までを国境の無いグローバルな視点で行うことが必要となっている。すなわち、みずから、グローバルな拠点に出向き、そこで働きながら国境なき「グローバルな人材」として成長することが、今後の生き残りの必須要件となる。グローバル・スタンダードにもとづく文化・倫理観や労働倫理も必要となり、コンセプトづくりの早い時期から諸外国の人々と協調して働く能力も必要とされる。

大学も同様であり、「国内企業への学生の供給」や「国内企業への研究成果の移管」だけではなく、グローバルな人材教育と研究が可能なアカデミアとしてグローバル拠点に向いて教育と研究を行うことが必要になっている。グローバル・スタンダードに基づいて運営されている欧米に留学した経験を有する現地人スタッフと協調することで、グローバルなアカデミアとしての能力を得ることが可能である。日本の高度教育を受けた人材は、諸外国の労働者やアカデミアと互角に処していける能力をすでに備えている。アジアという拡大するマーケットの一角を担い、日本のみならず欧米との交流の深い多民族国家マレーシアは、上記の目的にはベストフィットの

国であろう。

「コンクリートからヒトへ」という言葉を、もう一步先に進め、「モノの輸出からヒトの輸出へ」にかえると、「モノ」ではなく「ヒト」に投資する意味が一層鮮明かつ明確になる。なにより、アジアのマーケットサイズは大きい。



早朝の MJIIIT の建物と UTM モスク

右の灰色と赤の建物は、私の勤務するマレーシア工科大学 (UTM) 日本マレーシア国際工科院 (MJIIIT)、左の建物は、UTM 大学が所有するキャンパス内のモスク。マレー系の人々はイスラム教徒であり信仰心が厚い。昼の休み時間、夕刻には、このモスクに通ってお祈りをあげている。礼拝 (アザーン) の呼びかけが、写真中央の尖塔 (ミナレット) から流れてくる (モスクの両側にあるが、片側は写真には写っていない)。UTM から少し離れた場所にも古いモスクがあって、アザーンの声はそのモスクのほうがかききれいに響き渡っている。高齢者で肺活量が大きい導師が発するもののように思われる。しかし、金曜日の午後は、UTM のモスクの周囲に市が立ち、周りからたくさんヒトが集まって大活況を呈する。マレーシア風焼き鳥、サティをはじめとする食べ物屋台や南国のフルーツを売る果物屋さん、京都の友禅と同じ作り方をするマレー風のドレス、CD や DVD など売る店がたくさん出て、日本のおまつりの屋台街のような活況を呈する。大学がそんな役割を果たしているのは、昔の寺子屋や神事的な性格としてとらえられているからかもしれない。

5. まとめ

日本では、日銀の財政出動を皮切りに景気を浮上させ、企業が納める法人税の引き下げを行おうとしている。これにより海外への企業流出を防止し、また、従業員の給与を引き上げ、購買の拡大と物価上昇をもくろんでいる。しかし、こちらに来てみると

分かるが、すでに、活動の拠点を海外に移してしまっている企業が多い。また、日本の給与水準や物価水準が異常に高いことに気づく。さらに、「モノへの投資」に戻り、公共投資も始まるような機運である。日本の政策は、これで良いのかと考えさせられる。

同じ土俵でアジアの諸外国と競争するためには、日本人の多くが活動の拠点をアジアの国に移し、生活水準を同一あるいはそれ以上に保ちながら給与・物価水準を 1/3 程度まで下げてゆくことが必要である。また、現在、TPP において関税の撤廃を目指した取り組みが進んでいる。これを一步先に進め、たとえば、ネットマネーなども視野に入れた東南アジアとの通貨統合を行うことも一つの解決策ではなかろうかと思う。失われた 20 年を超えなんとし、破綻に向かいつつある日本に、残された時間は限られている。

現在、日本は、周りの国々と争いをしている。国というアイデンティティを守るために、物理的あるいは経済的な戦争に発展しかねないような危なさを感じる。第二次世界大戦時代には、大阪に第八連隊本部が置かれていて、「またも負けたか八連隊」と揶揄されていた。これには、「日本国を守るために死ぬまで戦う」というのではなく、「日本人として生き残るために戦う」、あるいは、もっと簡単に「負けるが勝ち」というメッセージがあったように強く感じる。関西人、大阪人の気質を考えると、「戦艦大和」ではなく、「名も無い駆逐艦」として外国に出向き、駆逐艦のそれぞれが、その場の戦況に従い、生き残る工夫をする必要がある。皆さんも、破綻しかかっている日本国と心中するのではなく、親日国家マレーシアへ出向いて、日本人として生き残る工夫をするのも一策ではないかと思っている。

皆さんのお越しを心よりお待ちしております。国境の無いボーダレス・グローバル社会では、国家でなく、まず、日本人が地球人として生き残り、その中で日本のアイデンティティを発揮できるかどうかが必要になっている。